

国際化に向かう大学教育とその認証評価 —視覚的分析の試み—

鈴木 典比古

国際教養大学理事長・学長

1-1 大学を評価する—物的財との比喻—

申すまでもないことだが一国の教育体制の中で大学・大学院はその最終段階であり、その意味ではその国の輩出する人材のレベル—もっと深くいえばその国の国力—を規定するものである。その大学を評価するという作業は、したがって、最高段階における人材創造過程とそのレベルを評価するということである。

さて、多少唐突感はあるが、この人材創造の過程を物的財の製造と輩出との比喻で考えてみよう。物的財の生産は工場という生産現場における原材料搬入、製造、完成品輩出、流通、販売、までを含む一連のプロセスである。21世紀に入って間もなく20年を過ぎようとしている現在、この物的財の世界はその生産と流通と消費が未曾有の速度でグローバル化し、国境の概念は形骸化しているといつてよい。今、同様の視点を用いて人的財の生産活動、即ち、「教育」という行為のグローバル化を考察するとしたら、どのような分析視点とその枠組みが可能であろうか。本稿では議論の進め方としては、多少非学術的、また異論もあるかもしれないが、あえて大学教育（別言すれば教育財の生産活動）のグローバル化を分析展望してみよう。このように、教育を教育財の生産活動としてとらえる視角は、もしそうでなかったならば思いつかないであろう着想と結論を導き出せるかもしれないのである。

1-2 教育財国際化の3次元

各国の高等教育体制が国際化に向かって進展していくというとき、それは具体的にどのような方向を指す

のであろうか。教育の国際化は留学生の増加や大学自体の海外進出や、最近ではMOOCs (Massive Open Online Courses) の進展など、その態様は多様化している。しかし、それらの多様な動きを総合的に捉えようとするとき、それは大まかに見て以下の3つの方向が考えられよう。

(1) 学生の国際間移動

(2) 大学間の国際連携

(3) 認証機関間の国際連携

(1) の学生の国際間移動は学生個人が教育の機会を求めて国際間を移動する行為である。(2) の大学間の国際連携は大学が教育の機会を自国以外の学生に提供するために国際間の連携・移動をする行為である。(3) の認証機関間の国際連携は、このようにして国際間を移動する大学群や学生達が授受する教育の質を確認し、比較し、保証するという第三者的行為の国際連携を指す。このように、教育財を創る行為を教育財の生産と呼び、その教育財の品質を保証する行為を教育財の質保証と呼ぶとき、上記の(1)、(2)、(3)の方向は以下のような別表現に替えられよう。即ち、

(1) 教育財の国際間移動

(2) 教育財生産者の国際間移動

(3) 教育財質保証機関の国際協働

かくして、高等教育の国際的展開の枠組みとその進展を分析し、その行く方向を予測しようとするれば、まずこの3つの次元それぞれがどのように国際的展開をするのかを個別に分析し、しかる後、この3つの次元を1つの枠組みの中に収めた3次元の空間を作成して

みることが有益であろう。

1-3 教育財国際間移動の諸段階

教育財の国際間移動は、以下のような4段階を経て進展するものと考えられよう。

第一段階 教育財の国内生産の段階

この段階では各国の教育財は国内の教育財生産者によって生産されているのみである。

第二段階 教育財の輸入段階

この段階では教育財が海外留学によって海外生産者に加工され、かくして海外で加工を施された教育財が母国に帰ってくれば、その教育財は海外で加工され母国に戻ったのであるから、これは加工した外国（留学先）から母国が教育財を輸入したことになる。明治初期の日本などは第一段階の教育財国内生産ができず、若者を海外留学させたわけだが、これはこの第二段階に相当する。しかし現在の日本では海外に留学する学生は減少の一途をたどっている。これは教育財輸入の減少である。

第三段階 教育財の輸出の段階

この段階では海外から留学生を受け入れ、加工を施し、この留学生を教育財として完成させ、この留学生の母国に送り返す。このことは当該国から留学生の母国に教育財を輸出していることになる。日本では海外からの留学生数が増加している。これは日本からの教育財輸出の増加を意味する。

第四段階 MOOCs による世界同時生産の段階

この段階では教育生産活動そのものが On Line でグローバル化され、世界中に瞬時に伝播されるので、学生自身は国際間移動をしないで外国の教育を受けることができる。教育そのものが全世界を駆け巡るのである。

1-4 教育財生産者の国際間移動

教育財生産者（大学）は国際間を以下のような段階を経て移動していく。

第一段階 教育財生産者の国内生産の段階

この段階では教育財生産者（大学）はその教育財生産活動を国内のみで行っている。

第二段階 教育財生産者の生産従事者交換の段階

この段階では各国間の教育財生産者が、自国の生産活動従事者である教員を海外の教育財生産者のもとへ派遣・出張（海外授業など）を行う。

第三段階 教育財生産者の海外進出

この段階では教育財生産者が自らの生産施設を海外に移転し、海外で教育財を生産する。これは教育財生産者の海外直接投資といえよう。

第四段階 MOOCs による教育財の世界同時生産

この段階では教育財生産者が海外に出向いて教育財を直接生産するよりも、On Line で全世界に向かって教育の同時配信を行う。したがって教育財生産者は国際移動する必要がない。

注目すべきは、教育財（学生）の国際間移動も、教育財生産者（大学）の国際間移動も、その最高段階に達すると、On Line を利用した MOOCs の導入によって、物理的意味での国際間移動は停止し、教育という生産活動のみが世界で同時に発現することである。

1-5 教育財質保証機関の国際協働

教育財の質を保証する役目を負う認証機関は国際間で以下のような段階を経て協働を深めてゆく。

第一段階 教育財質保証機関の国内活動の段階

この段階では各国の教育財質保証機関が国内の教育財生産者の生産活動が国内の法令に適合しているか否かを評価基準に照らして判定する。

第二段階 教育財質保証機関の相互認証活動

この段階では各国の教育財質保証機関が互いに相手国の教育財生産者の生産活動の認証評価と生産物の質の保証作業にオブザーバーとして参加し、それぞれの認証評価活動に随行する。

第三段階 教育財質保証機関の地域別認証団体 (Regional Accreditation) への参加の段階

この段階では各国の教育財質保証機関がアジアやヨーロッパや北米等の地域ごとに認証機関の団体を創

り、団体成員が相互に相手国の教育財生産者の生産活動の質保証と認証評価作業に参加し、共同して参加国の生産者にその生産物の質がお互いの評価基準に照らして適合していることを判定する。ここにおいて、評価基準の標準化、したがって、教育財の質の標準化が一層促進されることになる。

第四段階 各国教育財質保証機関の世界統一認証機構 (World Accreditation Association) への参加

この段階では全世界的に統一化された認証機関が創られ、各国の教育財質保証機関がそれに加盟する。各国の教育財生産者の生産活動と生産物の質は、この世界統一の認証評価基準によって適合、不適合が判定される。

さて、以上のように教育財（学生）、教育財生産者（大学）、教育財の質保証機関（認証機関）の三者が国際化、そしてグローバル化の方向へそれぞれに進展していくシナリオが描かれる。勿論、このシナリオの描写にはまだ顕現していない諸段階もあり、また段階間の移行に関してもその方向が論理的に一貫性を保っているか否に疑問なしとしない。その意味ではこの段階モデルは未だ理想型であって、十分な現実性には欠けるものであるかもしれない。したがってその前提に立つ論理の展開には抑制的配慮が十分に必要ではある。その上で議論を進めてみよう。

2-1 3次元空間上の教育財国際化

さて、これまでで展開してきた3つの次元の国際化プロセスを3次元空間に表現してみよう。図1がこれを示している。

この図1において、(1) 教育財の国際間移動、(2) 教育財生産者の国際間移動、(3) 教育財質保証機関の国際協働、の三者は三位一体のセットとしてこの3次元空間内に存在し、また空間内を移動していくことになる。そしてその移動の方向は原理的には原点を出発点として各軸から45度ずつ離れた方向の対角線に沿って進んでいくのが一番バランスの取れた方向であるといえるであろう（図1の対角線）。

それでは、図1において三位一体のセットが対角線

に沿って進んでいった場合、その最終段階ではどのような状況が待っているのだろうか。それは、図2において右上部のXという小さな四角形の空間に到達するということである。勿論、このX空間への到達には長い時間がかかるはずである。

2-2 X空間内での状況—世界の教育財の同質化

このXという四角形空間では以下のことが起っている。即ち、

- (1) 教育財の国際間移動では、その第四段階にあり、そこでは教育がOn Lineで世界中に瞬時に伝播される。他方、教育財たる学生は国際移動せず、

図1 教育財国際化の3次元空間

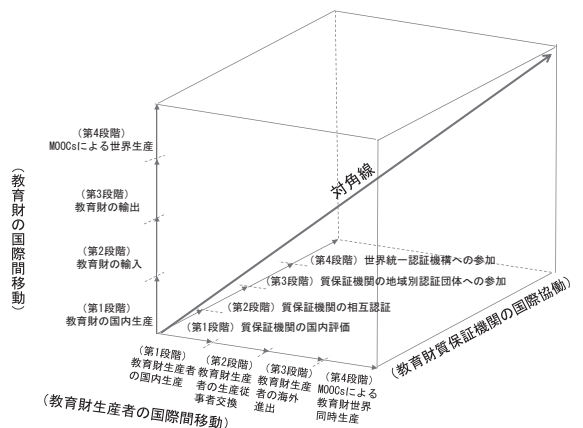
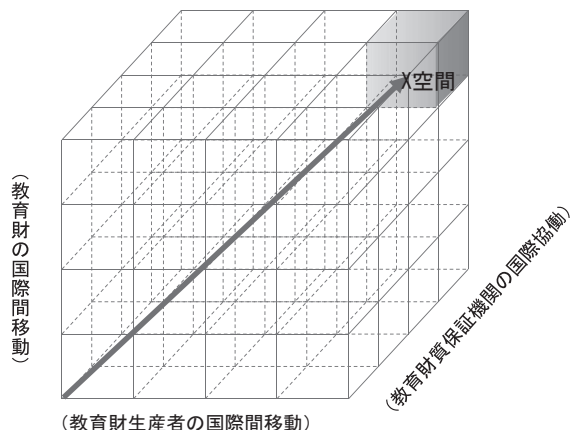


図2 3次元空間内のX空間



教育そのものだけが全世界に同時配信されている。

- (2) 教育財生産者の国際間移動ではその第四段階にあり、教育財生産者は On Line で教育の配信を行い、生産者は国際移動しない。
- (3) 教育財質保証機関の国際協働では全世界統一の認証機関が全世界で標準化された評価基準で教育財の質の保証し、適合、不適合を判定している。

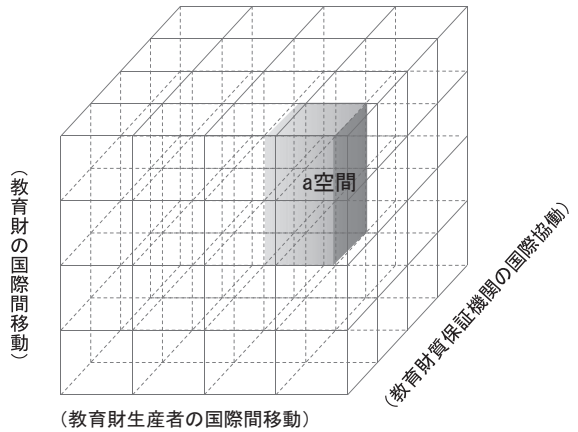
この X 空間が示す状況は、教育財生産という営為の世界標準化、均質化、そして巨視的に見れば静態化というものかもしれない。勿論このような状況は良い点と悪い点がある。良い点といえば全世界の大学教育はある一定の方向と質を伴って同質化し、かくして教育される学生も世界で同一水準の人材が膨大な数輩出され、人類の知的水準は高度化してゆく。他方で同一化される教育は教育の多様性を失わせ、したがって人間の多様性と人類の動的発展に停滞をきたすであろう。

2-3 3次元空間における現在位置

それでは、現在の教育財国際化はこの3次元空間内のどのあたりを歩んでいるのであろうか。教育財生産の国際化は長期的なスパンで見れば未だ十分進展していないために、現在の教育財国際化の段階は X 空間にまでは達していない。あえて大胆な描写を試みるならば図3における a 空間あたりではなかろうか。この a 空間では以下のような状況にある。

- (1) 教育財の国際間移動の軸ではその第二段階から第三段階への移行期にある。即ち、多くの国が海外に留学生を送ると同時に、海外からの留学生受け入れも始まっている。特に開発途上国は教育財の輸入（留学生送り出し）が盛んに行われる一方、これらの国でも教育財の輸出（留学生の受け入れ）が徐々に始まっている。これらは教育財の国際貿易だが、現段階では開発途上国による大幅輸入超過と米国などの先進国の大幅輸出超過、という教育財貿易不均衡の状態である。

図3 教育財国際化の現段階



- (2) 教育財生産者の国際間移動の軸ではその第三段階にある。即ち、特に米国、英国、オーストラリアなどの先進国の大学が海外分校を設立・増加させている。即ち、これらの先進国の教育財の海外生産が増加しているのである。
- (3) 教育財質保証機関の国際協働の軸ではその第三段階にある。即ち、各国の教育財質保証機関が地域 (region) 毎に認証評価団体を創り、相互に相手国の教育財生産者（大学）の生産活動の質保証作業に参加し、共同して品質が評価基準に適合していることを判定している。また、先進国の認証評価機関が開発途上国の教育財生産者に対して自らの品質保証を受けることなどを呼びかける招致運動も強まっている。

2-4 3次元空間における日本の大学の位置

さて以上のように、高等教育の国際化を3次元空間の中での動き（より具体的には左下の原点から右上の頂点に向って示される対角線に沿って動いていく）として捉えた場合、日本の教育財生産の現段階はどのように示されるであろうか。

それは図4において b 空間として描かれるものである。この b 空間において、日本の教育財生産は、

- (1) 教育財の国際間移動では、第二段階から第三段階への移行期にある。ここでは日本から海外に留学生を送る（教育財の輸入）と同時に海外か

らの留学生受け入れ（教育財の輸出）も行なっている。しかし、周知のように、近年、日本から海外に留学する教育財は減少を続けており（即ち、教育財の輸入の減少）日本政府はこの教育財輸入減少傾向に歯止めをかけ、輸入増加に転じるべく方策を練っているところである。しかしながら、物的財の歴史的経験からすると、物的財の場合輸入から、輸入代替に進み、次いで輸出に転じるというパターンが常態であるから、人的財の場合も、輸入の減少は次にくる輸入代替を経て輸出に転じるというパターンを辿るかもしれない。

- (2) 教育財生産の国際間移動の軸ではその第一の段階に留まっている。即ち、日本の大学は国内に留まって教育財生産を行うのみであり、第二段階の生産財生産従事者（教員）の海外派遣も始

まっておらず、まして生産財生産者の直接投資（第三段階）には達していない。

- (3) 教育財質保証機関の国際協働の軸では、質保証機関は国内の大学の評価の段階（第一段階）に留まっている。

かくして、図4に示されたb空間が示す日本の大学による教育財生産の国際化は（a空間が示す世界の国々の教育財生産の国際化に比較して）未だその国際化の端緒にもついていないといえよう。

おわりに

さて、以上のような教育財国際化に関する3次元空間での教育財生産の位置付けの試みは、対象とする大学が膨大な数にのぼり、それらを、空間的概念を用いて段階付けし、視覚化することには、論理的緻密さが不足していることは認めなければならない。しかしながら、そのような留意の下で、教育財の国際化がどのような方向に、どのような速度で進んでいくかを予測することは興味あることであろう。また、各国の具体的な高等教育政策の立案や実行にも意味ある提言ができるかもしれない。ただ、本稿の最初にも述べたように、教育は国力涵養の根本を占める枢要な事業であり、国民国家による自国国家形成の立場からすれば、教育の国際化の論理がそのまま受け入れることが難しい場面もありうるであろう。ここに、教育の国家主義的論理とその国家主義的論理を超えた国際化への論理との間に緊張が生まれることは十分に考えられ、今後はその緊張の度合いが増していくであろう。

図4 3次元空間における日本の教育財の位置

